

県中教研

特別活動部会だより

第 34 号

発行日 平成31年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 小幡 幸治
題 字 金山 泰仁 先生

三つの視点を意識して

指導主事 本多 勝志

研究大会の授業が、魚津市立東部中学校と高岡市立伏木中学校で、「合意形成を目指す話し合い活動」に焦点を当てて実施されました。

魚津市立東部中学校では、生徒がインターネットとの関わり方を振り返り、より安全に使っていくためのルールを考えたり、希望の進路の実現に向けて、学級全体で学力向上を目指す取組を考えたりする授業が行われました。どちらの授業も生徒自身が問題提起することで、課題に対して切実感をもち、主体的に話し合いに臨むことができていました。

さて、新学習指導要領の「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」の三つの視点は、特別活動において育成する資質・能力における重要な要素であり、これらの資質・能力を育成する学習の過程においても重要な意味をもつとされています。その中の「社会参画」とは、よりよい学級・学校づくりなど、集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決しようとすることです。今回の授業で、生徒が課題に対して考えを深め主体的に話し合うことができたのは、日頃から担任教師が「社会参画」の視点を大切に指導しているからと考えます。生徒は受身的に参加するのではなく、学級活動の計画の段階から積極的に関わり、問題点を探し出し、生徒同士で話し合っ問題点を解決しようとする意識が高まったことで、主体的な活動である「社会参画」につながった好事例と考えられます。

特別活動は、今年度から新学習指導要領により、各校で活発に実践されています。今後も、三つの視点を意識して、特別活動における資質・能力が育成されることを期待しています。

また、今回の改定では小学校での活動を踏まえ、中学校3年間の学校生活を見通した系統的、発展的なガイダンスの充実が述べられています。これからも合意形成や意思決定を主体的に行い、意欲的に実践に結び付けようとする生徒を育てていきたいものです。
(東部教育事務所)

新学習指導要領のもとで

部長 小幡 幸治

今年度、新学習指導要領の先行実施に合わせ、研究主題を「学級活動を通して身に付けるべき資質・能力を育成するための指導は、どうあればよいか」副題を、「生徒が主体的に参加し、合意形成を目指す話し合い活動を通して」としました。ここ数年の反省として必ず挙げられたのが、話し合い活動における合意形成の在り方であったため、今年度は、このことについて会員の皆さんの参考になるものという思いでスタートを切りました。

第62回研究大会は、東部地区は魚津市立東部中学校を、西部地区は高岡市立伏木中学校を会場として行われました。両会場ともに、本時の学習までに話し合い活動を積み重ねたことが、課題に対する切実感を高め、本時の話し合いを主体的にさせる手立てになっていました。また、話し合い活動に積極的に取り組む生徒の様子は、学校全体で話し合い活動に毎週取り組んできた成果が表れていると感じられました。

一方で、新たな課題も見られました。両会場とも合意形成に重点を置いたことで話し合いの充実にはつながったものの、意思決定で十分であった課題まで合意形成を図るという展開になりました。授業力向上アドバイザーの島田光美先生からは、その課題が合意形成と意思決定のどちらに導く必要があるものなのかを、生徒にも明確にしておくことで、より充実した話し合いになるとアドバイスをいただきました。来年度はこの点に考慮しながら、小学校での話し合いを生かし、主体的に取り組む生徒の姿が各校でみられるように進めていきたいと考えます。

毎年、部員の入れ替えが激しい特別活動部会ですが、部会協議に参加された先生の感想に、「普段話し合い活動について真剣に意見交換する機会がなかなかないので、参加できてよかった」という意見が多数寄せられました。次年度も、是非こういう感想がもてる会になることを期待しています。

(富・東部中)

第62回 富山県中学校教育課程研究大会

東部地区（魚津市立東部中学校） 平成30年10月10日（水）

第2学年では、「2年3組のネットルールを決めよう」を議題にした授業が行われた。

司会者の生徒が中心となり、班活動への目配りや気配りを行いながら、授業の始まりから終わりまで円滑に進行していた。

授業では司会者からの議題とその提案理由を受けて、9つの班を3つに分け、「時間」「人間関係」「危険」の3つの視点に対して、それぞれ3つの班が担当して話し合った。そして、班で決定したネットルールと、設定理由を全体の場で説明した。



発表を聞いた上で、その中から、一人一人がよいと思ったネットルールに記名したシールを貼り付け、理由を説明した。その後、生徒はシールの数や選択した理由の説明・意見を参考に、クラスのネットルールを生徒全員の合意によって決定し、実践への意欲につなげていた。

協議会では、「事前の資料の準備ができて」「生徒が主体となってスムーズな進行ができて」「反対意見もでるような話し合いになればよかった」「意見を議論する場が少ない」「少数派の意見を議論する場があればよかった」といった意見があった。合意形成を図る上で自分とは異なる立場を考えさせることは、話し合いを深めていくためには必要かと思われた。

京貴広指導主事（東部教育事務所）からは、「議題設定は、生徒たちが話し合いをする中で、切実感、必要感のある議題となっている必要がある」「ルールをつくるのが目的ではなく、つくったものを自分たちの生活に落とし込むことが大事になってくる」等の助言をいただいた。

平井 康裕（滑・滑川中）

第3学年の授業では、「進路実現に向けて、学級全体で学力向上を図るにはどうすればよいか」を議題として話し合いが行われた。



話し合いは、生徒が司会を務め、円滑に進められた。授業者と司会者の事前の打合せが綿密に行われており、事前指導の重要性を再認識できた。

話し合いを進めるにあたって、「① 目指す姿を設定する」、「② 問題点を明らかにする」、「③ 具体的な取り組み案を考える」の三段構成で話し合うよう司会者が促し、話し合いをスムーズに進める工夫がみられた。また、「いつ」「どこで」「だれが」「何を」カードを活用することで、具体的な行動目標が各班から提示され、自分たちにとってより実効性のある解決策を見いだすことができていた。

班の話し合いも、話し合った内容をシェアする全体の場でも、互いの考えを尊重しながらも忌憚りの無い意見交換ができており、普段の学級経営において、学級の温かい雰囲気づくりができていたようであった。

寺田雄一郎（下・朝日中）

協議会では2色の付箋を使い話し合った。「学級会全体の構成が良かった（タイムキープ、机の配置）」や「意見の修正には、理由を発表することでより深まるのではないか」といった意見や提案があった。

藤井昭彦指導主事（東部教育事務所）からは、「今回の授業では、生徒が主体的に学級会に臨んでいた。互いに認め合う学級経営を日頃から行うことがいかに大切かを改めて感じた」「建設的な意見や話し合いが学級会をより深めるものになる」等の助言をいただいた。

杉田 郁弥（中・上市中）

第62回 富山県中学校教育課程研究大会

西部地区（高岡市立伏木中学校） 平成30年10月10日（水）

第1学年の授業では、夏休み中のメディア利用の自己評価を基に決めた学級のルールを見直すため、「メディアと関わるときの『1-3ルール』を見直そう」を議題とした話し合い活動が行われた。

学級で決めたルールの取組自己評価結果を確認し、その結果からルールを守るための工夫や、守れなかった理由を付箋に書く活動を前日に行った。本時ではその付箋を、グループ分けした資料を用いて班で話し合いを行った。他の意見と関連付けしやすくなり、メディアルールの見直しについてより深く考えて意見を出し合うことができた。



全体の話し合いでは各班の意見をホワイトボードに書いて提示し、質問や疑問点を交わした後、ボルダールールを使って合意形成を図った。少数意見に目を向けることができたり、複数の意見を踏まえた上で新たな提案が生まれたりし、ボルダールールの結果を基にした実現可能で新しい学級のルールを学級で考え、決めることができた。

協議会では、生徒が自分の意見をもった上で話し合い活動に参加するための手立て、全体の場で意見を共有するための方法、ボルダールールを話し合いで活用する方法等について、様々な意見の提案があった。

高川芳昭指導主事(西部教育事務所)からは、「普段からの指導により、生徒だけで主体的に話し合いや発表ができていた」「『ルールは変えず意識を変えよう』と提案した少数派の意見をもう少し取り上げてよかった」「話し合いを生かした一人一人の自己決定をする場面を大事にすることで意味のある活動になる」等の助言をいただいた。

金田 美穂 (砺・庄西中)

第2学年では、「14歳の挑戦に向け、自分たちをレベルアップさせるための行動目標を考えよう」を議題にした授業が行われ、学校生活を振り返り、「挨拶」「仕事」「態度」についての成果や課題を班や項目ごとのグループで話し合い、学級全体で行動目標を決めた。



話し合いは、付箋を用い生徒に役割を与え、項目を3つにしぼることで、より活発な話し合いになるよう工夫されていた。また、KJ法により練り上げたグループの案を全体で発表し合い、質疑応答で意見交換しながら合意形成を図った。

協議会では、「話し合う項目がはっきりしていることや付箋の色が分かれていることで、自分の意見をしっかりと発表することができていた」「日頃から話し合いの経験を多く積んでいることや互いに何を言っても大丈夫だと思える学級の雰囲気話し合いを効果的に進めていた」「付箋に名前を書いておけば、話すことが苦手な生徒も参加しているという意識をもつことができる」「全体で話し合った結果から、自分ならばどうするかと最後には個に返す時間を設ければよかった」等の意見が挙げられた。

高川芳昭指導主事(西部教育事務所)からは、「間近に迫った14歳の挑戦と関連付けて行ったことで活発な話し合いにつながった」「合意形成は、みんなもよくて自分もよいという意見をみんなできりあげていくこと」「話し合う議題や場面によっては、KJ法以外の思考ツールや話し合いの手法も効果的な場合も考えられる」等の助言をいただいた。

朽木 淳司 (射・小杉中)

授業力向上のためのアドバイザー 特別活動
小中学校9年間の連続性を踏まえた特別活動

～学級活動を核にした
話し合い活動の充実を
目指して～

日本体育大学
体育学部兼任講師
島田 光美



1 9年間の連続性を意識した学級経営

(1) 集団と個を高める学級・学校の原風景の描き方

① 目の前の子供とどのように向き合っていくかを考えて、支持的風土をつくっていくことが大切である。それにより、学級の質（連帯感や仲間意識、愛着、信頼、課題解決）の向上を図ることができる。

② 学級経営（学級づくり）をしっかりとすることによって、学力や人間関係が育っていく。

(2) 出会いー日常ー別れの工夫・演出

出会い（四、五月）、日常、別れ（三月）を意識した特別活動をすることが大切である。

（例 新入生へのメッセージカード作り、新入生の教室の歓迎を表す掲示物作成）

充実した特別活動にしていくためには、次の3つがポイントである。

① 全員で取り組むだけの価値ある実践をつくる。

② 日常生活の中で「問題意識から課題意識」へ成長させていく。

③ 学校や学年の教育目標の実現を目指した実践をつくる。

2 小中学校連携（一貫）として特別活動を研究する意義・ねらい

(1) 適応に係る諸問題の解決（中一ギャップ）

① 児童や保護者へのアンケートを行うことによって、中学校入学への悩みや不安を取り除き、希望や期待をもたせることができる。

② 夏休み部活動体験をさせることによって、小学生と中学生の交流をさせるだけでなく、小学生に憧れの存在をイメージさせることもできる。

(2) 帰属意識の高揚

① 学級、学校の諸問題の発見とその解決を考えることによって、係活動、当番活動を充実させることができる。

② 誕生日を祝うことによって、一人一人がかげがえない存在であることを自覚できるようになる。

③ 地域清掃によって、地域への関心が高まり、地域貢献へとつながっていく。

(3) 積極的な（攻めの）生徒指導

① 計画的、系統的な学級活動を実施することにより、よりよい人間関係づくりや校風づくりに役立てることができる。

② 発達段階に応じた実践によって、自発的、自治的な活動の機会と場の設定がなされるようになる。

③ 効果的な手立て（方策）を共有することによって、関連題材の設定や関連議題の選定をすることができる。

3 学級活動の議題、題材の系統性、一貫性及び児童会生徒会活動、学校行事とのつながり

(1) 学級活動の内容

① 「学級や学校における生活づくりへの参画」＝合意形成

② 「日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全」＝意思決定

③ 「一人一人のキャリア形成と自己実現」＝意思決定

(2) 児童会生徒会活動、学校行事

小中学校で共通な取組をすることによって、一体感が生まれ、よりよい学校・校区をつくっていかうという気持ちを育てることができる。

岩城 哲也（魚・西部中）